

晴れの日が続いておりますが

そろそろ梅雨入りでしょうか

これを書いてるのは六月六日です。少々ドタバタしてしまい、五月後半の号を飛ばしてしまいました。すみません。

さて、5月半ば過ぎから今日まで、ずっと晴れの日が続いております。途中一日くらい雨が降りましたが、空気も乾燥しており、農作物などにはちよつと心配な天気です。ただ、週間天気予報などを見ると、今週から来週にかけては梅雨前線が北上を始め、九州も梅雨入りしそうな感じですよ。

この時期は湿度も高くなり、また室内の温度も高くなりますので、カビなどの雑菌も繁殖しやすい条件が整います。ということは、食中毒が発生しやすくなり始める時期でもあります。

調理道具や食器などはきちんと洗い、またために手洗いをするようにしていただければ、食中毒は未然に防ぐことが可能です。皆さま気を付けて生活をしましょう。



神社うんちく帖

さて、今回もまた「神社うんちく帖」として連載を続けていきたいと思えます。「うんちく」からは大きく外れていますが、もう少しだけ「神道の源流」についてのお話におつきあいくださいませ。

今回のお題は

「神社の始まり」

神社がどうやってできてきたのかです。

◆神社の成り立ち

そもそも、そこは「死と再生」の儀礼が行われる場所でした。その象徴ともいえる太陽信仰は、その頃には生まれていたと思われまふ。

いつ頃からかは定かではありませんが、農耕が始まり、春と秋の「祭り」が行われるようになりまふ。春は種まき、秋は収穫の季節であり、人々の生活の重要な節目となります。この時期に「祭り」を行うことはとても重要なことでした。

こうした「祭り」は、神さまにお降りいただく聖なる「御座所」に、その都度祭場を設けて行われていましたが、やがてその聖なる場所に垣根を巡らせたりして、いつも「神祭り」が執

り行える施設が作られるようになりました。

それが「神社」の始まりです。

神社は周囲を囲まれて、そこは「聖域」として、人間の世界から切り離されました。

そして

○神さまの宿り坐す場所としての「本殿」

○ご神体を拝む場所としての「拝殿（はいでん）」

○神さまに捧げる幣帛（へいはく）を祀る場所としての「幣殿（へいでん）」

が作られ、いまの神社の形態が整いました。

もちろん、古い形を残す神社などでは、ご神体そのものである山（これを「神奈備（かんなび）」といいます）を拝むため、本殿が作られない神社もあります。

他にもそういう神社はありますが、これは、そもそも「御座所」がそういう自然の山や森、滝や川、丘や海、島などが神の坐す場所であったことの名残でもあります。